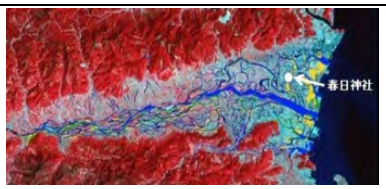
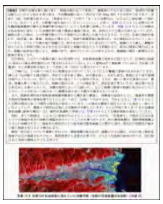
徳島県の地震・津波に関する防災風土資源

整理番号	徳震１	徳島沖積平野液状化（春日神社敬渝碑）

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県板野郡松茂町中喜来牛飼野、春日神社			
見所・アクセス	徳島県の空の玄関、徳島空港西方約１．６ｋｍの吉野川バイパス沿い、春日神社境内に、安政南海地震のことを記した『敬渝碑（けいゆひ)』があります。			
写真・図	写真１ 写真２ 写真３  写真４ 写真５  写真６ 写真７ 写真８			
解説文	徳島県松茂町中喜来にある春日神社には、安政南海地震（1854 年 12 月 24 日）の様子を漢詩で刻んでいる『敬渝碑（けいゆひ)』（**写真 1**）があります。この碑には、山は鳴り大地が揺れ、寺社や人家が多く倒れ、水が噴き出し・・・」と液状化現象が起こった事実が記されています。高速道路鳴門インターから徳島空港に行く国道 11 号沿いの場所に春日神社（**写真 2**）があります。 吉野川は源を瓶ヶ森に発し、四国山地に治って東流し、徳島県に入ると北に流れ、三好市池田で阿讃山脈にぶつかると向きを東に変え、中央構造線に治って河口まで約舶同流れ下る大河川であります。作家の司馬遼太郎さんは、『街道をゆく』の中で『まことに吉野川は、ふかぶかと地を這って流れている。川というより、大断層の底を流れているといっていい。』と述べ **写真 3** のように吉野川が中央情造線地すべり地帯の開けた沖積平野を流れていることを見事に表現しています。 **写真 4** のように吉野川が自由奔放に流れていた沖積平野の地下構造は繊細で粘土、砂、砂利などの土質から成り立っています。徳島の多くの街は. この沖積平野のデルタ地帯の上に繁栄した街でありますが、今では、各地の地形が変わり、旧河道、池、湿地、田畑など埋め立て、宅地や産業用地に転用され、元の地形はわかりにくくなっています。このような埋立地の地盤には、砂や水分がたくさん含まれています。地震により激しい震動が加えられると砂粒の聞にある水の圧力が高まり地盤が泥水のような状態になり、泥水が地表に噴き出します。地盤の液状化が起こると、地盤の沈下、地中のマンホールの浮き上がり、建築物の傾き、転倒などの被害が発生します。なお、南海地震を知る徳島県の地震・津波碑（徳島大学環境防災研究センター2008 年 2 月発行）の徳島県内の３２石碑（**写真 8**）の中で、この敬渝碑は最も北にある碑であります。 詳細は、四国の地盤 88 箇所１３番の中で、**写真 5, 6, 7** の資料のようにまとめて紹介しています。			

得られる教訓	大地から水が噴き出した、現在の「液状化現象」が起こったという、先人が残した碑文の防災メッセージは、沖積平野は液状化の危険性が高いことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	徳震２	百度石に刻まれた教え

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県徳島市南沖洲１丁目、蛭子神社			
見所・アクセス	徳島市南沖洲にある蛭子神社境内に、安政の地震後に建てられた砂岩に彫られた百度石があります。石の劣化がひどく、現在は前面の百度石と裏側の部分だけで、裏面の教えの刻字も見えなくなってきています。			

写真・図

写真１

写真２

写真３

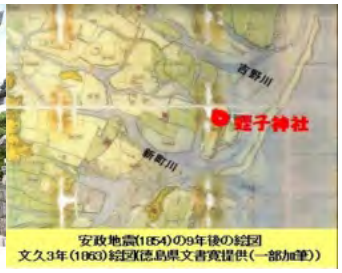


写真４

写真５

写真６

解説文

徳島市沖洲にある蛭子神社に、安政の地震後に建てられた百度石（**写真 1**）があります。

その側面、裏面（**写真 2**）には地震時の様子が刻字されていて、大地震は百年に一度くらいあるので注意するよう警告しています。現在では両側面が剥がれ落ちて、二面にわずかに碑文が見える程度になっていますが、多くの人が目にする場所に刻字し、しかも災害の痛みを忘れ、備えを怠るころの子々孫々の私たちに伝承しようとした先人のアイデアに感心します。特に、警鐘文のとおり百年も経たない 92 年後（安政南海地震 1854 年から昭和南海地震 1946 年）に昭和南海地震がやってきた事実のとおり、「震濤」という言語で大きな揺れと大津波がやってくることを予測していたことであります。

私たちはあまりにも幅の広い現実味のない予測は慎むべきでありますが、この「ももとせ（百年）を経ぬ程には」という例えは、現在の今後 30 年以内に南海トラフ地震が発生する確率 70%程度、という予測を一言で表した、現在にも通ずる名予知文であります。

ちなみに四国の多くの街は沖積平野にありますが、江戸時代文久３年（1863 年）絵図（徳島県文書館提供）**写真 4** のように徳島は、吉野川の沖積平野のデルタ地帯の上に繁栄した街であることがわかります。安政南海地震の当時は、蛭子神社（**写真 3**）は海に近く津波被害を受けたのでないかと思われます。

現在の航空写真(**写真 5**)に百度石がある蛭子神社の場所を示します。また「この百度石は、1854 年の安政南海地震（M8.4）の被災状況から得られた教訓と「百年もすれば巨大地震がまた起きる」ということを後世に残すために、1861 年に建立されたものです。」と書かれた説明看板（**写真 6**）が設置されています。

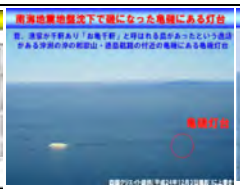
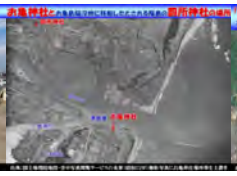
百度石に刻まれた南海トラフ地震の周期的な発生の教え、地震・津波対処法に学ぶことを教えています。

得られる教訓	百度石に刻まれた南海トラフ地震の周期的な発生の教え、地震・津波対処法に学ぶことを教えています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト

時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降

整理番号	徳震３	亀磯灯台

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県徳島市の沖州港の沖合、亀磯灯台			
見所・アクセス	徳島市東沖洲の突堤から約 1km の沖合にある亀磯灯台がある場所は、今はお亀磯と呼ばれ、干潮時には礁頭が肉眼でも見える程度出てきます。そこには昔、漁家が千軒あり「お亀千軒」と呼ばれる島があったという言い伝えがあります。			
写真・図	写真 1	写真 2	 写真 3	写真 4	写真 5
	写真 6	 写真 7	写真 8	写真 9	写真 10
解説文	徳島の沖州港の沖合には、亀磯灯台（**写真 1**）があります。この亀磯に関する言い伝えがあります。昔、徳島の津田から 1 里ほど沖合に浮かんでいた亀島という島がありました。島にはたくさんの漁師が住み、漁家が千軒あることから「お亀千軒」（**写真 2**）と呼ばれていました。 昔の南海地震で、この島が陥没して海中に沈み、島から避難した人が徳島の福島や津田等に移り住んだと伝えられています。その大地震は、正平 16 年（康安元年）1361 年やそれ以前の大地震であるなど諸説があります。かつて島であったところは、今はお亀磯と呼ばれ、干潮時には礁頭が肉眼でも見える程度出てきます。その暗礁の上に灯台が建てられています。 現在の航空写真から沖洲埋め立て地の約 2km の沖の紀伊水道の和歌山・徳島航路の近くにある亀磯にある亀磯灯台は、**写真 3** のように確認できます。また沖洲の海岸堤防から撮影した**写真 4** に亀磯灯台がはっきり確認できます。 徳島市史第六巻（令和 2 年 3 月 1 日発行）には、お亀磯伝説として「津田の沖合 5km ほどのところにあったとされるお亀磯は、昔は亀島と呼ばれ、1000 軒も家があったという。島に祀られていた銅製の鹿（狛犬という説もある）が赤くなった時には島が沈むので、その時は一刻も早く島から逃げるようにという言い伝えを聞いた若者が、いたずらで鹿の面を赤く塗ったところ、本当に大きな音をたててあっという間に島が沈んだという伝説が残されている。亀島があった場所は、現在ではお亀磯と呼ばれ、暗礁の上に灯台が建てられている。阿南市出身の郷土史家島田泉山による『徳島市郷土史論』によると、お亀磯の陥没年代は康安地震が起こった康安元年と比定されている。一方『名東郡史』等には、お亀磯が津田より東南の方 1 里（約 3.9km）ばかり隔たった海中にあり、昔、漁家が多くあったので、お亀千軒と呼ばれていたとされ、文禄 3 年（1594）年 8 月 6 日の天変地異のためにわかに海中に沈み、その時逃れた人々がが、安宅・大工島・福島・津田等に住居を定めて今日に至る。」と紹介されています。 陥没時に津田浦に逃れた人々が住んだと言われる津田地区では、現在でも、お亀磯の氏神を勧進したお亀神社（**写真 5**）を津田港（**写真 6**）の東側に祀っています。戦後の米軍航空写真（**写真 7**）に「お亀神社」場所を示します。合わせて現在の航空写真（**写真 8**）に、「お亀神社」と、お亀島陥没時に移転されたとされる寺社、福島の四所神社（**写真 9**）と西二軒屋の潮見寺（**写真 10**）の場所を示します。 この亀磯伝説から、過去の南海地震では大きな地盤沈降があったことを示唆されていることを知り、今後の防災対策を考えていくことが必要と教えています。			

得られる教訓	昔の南海トラフ地震では大きな地盤沈下が起きたという伝承があること、昔の伝承を知り前兆があれば、速やかに避難することを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震４	赤石豊浦神社の板石碑

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県小松島市赤石町　豊浦神社			
見所・アクセス	小松島市赤石にある国道 55 号と県道 120 号線の大林北交差点を北に約 800m進んだ地点の交差点を右に曲がり県道 218 号を東に約 500m の所の小道を右に入った所に豊浦神社があります。 神社入口鳥居の右に、高さ 3m 余りの安政南海の出来事が記された碑があります。			

写真・図

写真 1

写真 2

写真 3

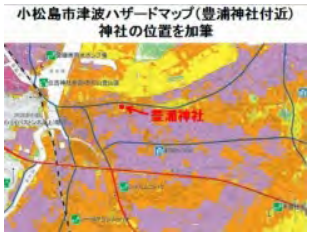


写真 4

写真 5

解説文

小松島市赤石町にある豊浦神社には、安政南海地震の出来事が記された板石碑（**写真 1**）があります。神社入り口の鳥居の右に高さ３ｍ余りの石碑（**写真 2**）が建立されています。その碑には、津波で大勢の人々が流されたが、白楽天王のご加護でこの付近では、難を逃れたと刻されています。

白楽天王とは、この神社のご祭神で、以前は白楽大明神と呼ばれていたそうです。また、ここは赤石で、豊浦町は道路の向かいですが、昔はこの辺り一帯を豊浦浜と呼んでいました。神仏分離令が出され、豊浦神社と改称されました。

現在、豊浦神社横のコミュニティーセンター新開会館の敷地には**写真 3** のように防災倉庫が設置されているものの、小松島市の津波ハザードマップ（**写真 4**）では、豊浦神社と同じ浸水深さ２～３ｍとなっています。また神社南の指定避難所になっている新開小学校（**写真 5**）でも浸水深さが２～３ｍとなっており、安政南海地震の時に難を逃れたこの地域も、南海トラフ巨大地震津波の想定では大きな被害を受ける可能性があることがわかります。

得られる教訓	この神社は今では避難できる高所とはいえませんが、津波来襲の恐れがある時は、一刻も早く近くの高い所に避難するとこが大切であることを教えています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震５	立江八幡神社「農地災害復旧碑」

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県小松島市立江町新開　八幡神社			
見所・アクセス	国道 55 号の徳島南バイパスを阿南へ向かって立江川橋の手前を右に曲がり立江川沿いの約 100m に橋を渡ると正面に立江八幡神社があります。境内に昭和南海地震後の農地災害復旧事業を後世に伝える「農地災害復旧碑」があります。			
写真・図	写真 1　 写真 2　 写真 3			
解説文	小松島市立江町新開の八幡神社（**写真 2**）境内（**写真 3**）に、昭和南海地震(1946. 12. 21)後の農地災害復旧事業を後世に伝える「農地災害復旧碑」（**写真 1**）があります。 「大地震に起因する地盤沈下により立江町の水田 40 町歩が、悪水の滞留のため不毛の地と化した。 災害後、農地改良復旧事業として昭和 27 年 3 月に着工、総工費 3,300 万円の巨費を投じて昭和 31 年 3 月に竣工した。」などと刻まれています。			

得られる教訓	昭和南海地震の発生により地盤沈下が起き冠水した水が長期間滞留、農地などに被害が出た。その後の地盤沈下対策として農地の復旧・復興には、排水施設の整備などが必要なことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震６	長願寺の「扁額（へんがく）」

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県名東郡佐那河内村上久保井１０１			
見所・アクセス	国道 438 号を佐那河内村役場を通り越して西側約 2.1km の道路右側の眼下の集落を望めるような少し高い場所に長願寺があります。ここには、蜂須賀家の家老賀島家の大書院に使われていた戸板で作られた「扁額」に、安政南海地震の様子が記されています。			
写真・図	 長願寺の「扁額」 写真１	 長願寺（佐那河村） 写真２	 長願寺境内から眼下の集落を望む写真 写真３	
解説文	佐那河内村から神山町に抜ける新しいバイパスの近くに、新装となった長願寺（**写真 2**）があります。**写真 3** のように長願寺は眼下の集落を望めるような少し高い場所にあります。ここには、蜂須賀家の家老賀島家の大書院に使われていた戸板で作られた「扁額（へんがく）」（**写真 1**）に、安政南海地震（1854.12.24）の様子が記されています。 それには、後世の人が忘れないように、「大地震で多くの家屋が倒壊、津波により海辺の家屋が流出、徳島城下や小松島では大火災が発生し、数千戸の家屋が焼失した。」などと記されています。			

得られる教訓	安政南海地震で、徳島県下で死者が最も多かったのは徳島市です。当時の徳島城周辺は人口が多く、家屋も集中しており、地震後に各所で発生した火災により、死者 73 名、負傷者 131 名を出しています。 家屋が密集している地域では、地震時に火災への備えをおろそかにしてはなりません。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震７	妙法寺の「庚申塔（こうしんとう）」

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県那賀郡那賀町谷内下傍示９４			
見所・アクセス	鷲敷から那賀川沿いの国道 195 号を上流に向かうと阿井郵便局があり、この横に県道 291 号線を約 2.7km 上ると川の対岸に同じ形をした住宅が十数軒見えます。 県道左の坂道を降りたところにある橋を渡り、その住宅を過ぎて山道を上ると妙法寺に着きます。寺には安政南海地震により損壊し再建された「庚申塔」があります。			
写真・図	 写真１	 写真２	 写真３	 写真４
解説文	那賀町（旧相生町）谷内の妙法寺は、那賀川中流の支流谷内川の山合にあります。現存 する「庚申塔」（**写真 1**）は、安政南海地震(1854.12.24)により損壊したため、1858 年に再建されたものです。 海岸から 20km も離れた山間部で石塔が損壊したということは、この地は震度 5 以上の揺れに襲われたことを意味します。 「庚申塔」は那賀郡那賀町谷内下傍示 （**写真 2**）の妙法寺境内（**写真 3**）にあり、安政 5 年(1858)に再建（**写真 4**）されています。			

得られる教訓	次の南海地震の揺れの大きさは、この安政南海地震と同じかそれ以上といわれています。沿岸域ばかりでなく、中山間地の住民も、地震対策を怠らないことが大切です。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震８	中央構造線池田断層

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県三好市池田町ウエノ			
見所・アクセス	池田町市街地の段丘面には、ほぼＮ７５°Ｅ方向の直線的な崖が発達いています。この崖は、西部で約 30m、東部で約 20m の落差があり、中央構造線池田断層によって形成されたと推定されていいます。　JR 土讃線阿波池田から徒歩で 600m 北にあります。			

写真・図

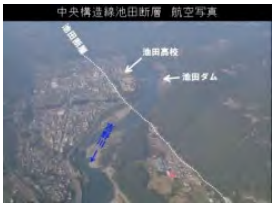


写真１

写真２

写真３

写真４

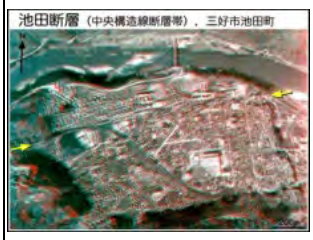


写真５

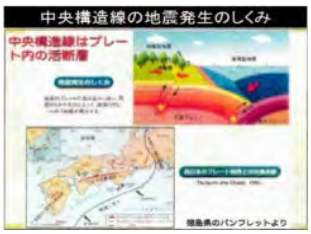


写真６

写真７

写真８

解説文

徳島県三好市池田町には、中央構造線池田断層（**写真 1、2、3**）があります。JR 土讃線阿波池田駅から北におよそ 600m、池田町市街地の段丘面（**写真 4**）には、東西方向に直線的な崖が発達しています。この崖は西部で約 30m、東部で約 20m の落差（**写真 5**）があり、中央構造線池田断層によって形成されたと推定されています。中央構造線はプレート内の活断層で、海側のプレートの沈み込みに伴い、周囲からかかる力によって陸側のプレート内で地震が発生します。（**写真 6**）

徳島大学環境防災研究センター設立 10 周年記念シンポジュウムの環境防災研究センター長　村田明広教授の講演史料「徳島県およびそお周辺の活断層と地震」によると、中央構造線断層帯の今後 30 年以内に地震が発生する確率は、四国全域で、ほぼ 0%～0.3%と言われています。1000 年～1600 年に 1 回活動していますが、最後の活動からまだ 400 年しか経ていないので、30 年確率は低くなっています。1600 年に 1 回なら「ほぼ 0%」、1000 年に 1 回なら「0.3%」。これでも日本の活断層ではやや高いグループに属するとされています。

この中央構造線池田断層は、香川大学長谷川修一教授が四国地盤 88 箇所 8 番の**写真 7、8** の資料で詳しく紹介されています。

得られる教訓	池田には中央構造線の断層跡の落差が現地に残っており、中央構造線位置と方向が確認できることや、この断層の発生確率は、海溝の南海トラフ地震より低いことを教えてくれています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	徳震９	善徳地すべり、安政南海地震崩壊

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県三好市西祖谷山村善徳			
見所・アクセス	ＪＲ土讃線大歩危駅から東へ約６㎞のところに、祖谷のかずら橋があります。そこは三波川帯における典型的な地すべり地で、地すべりによってできた緩斜面末端部にある遷急線から下の急斜面がつくる渓谷にかずら橋がかかっています。			
写真・図	 写真１	 写真２	 写真３	 写真４
	 写真５			
解説文	徳島県三好市西祖谷の善徳地すべりは、安政南海地震（1854）により大崩壊が発生し、その後も間欠的に地すべり変動が発生しています。平成 11 年に発生した「とびのす谷」の土石流では、**写真 2** の右下の写真のようにホテル等が破損し、県道が 160m にわたり埋没しました。「祖谷のかずら橋」周辺の地すべり防止区域は、直轄地すべり対策として様々な対策が実施されています。池田から高知に向かって国道 32 号沿いに走り、吉野川に架かる祖谷口橋または大歩危橋を渡り祖谷川沿いに有名な観光地の祖谷のかずら橋を目指しください。祖谷のかずら橋の駐車場周辺が善徳地すべり地帯です。**写真 1** のように、その山腹に様々な地すべり対策を沿道から見ることができます。徳島県三好市西祖谷山の善徳地すべりは、吉野川の右支川、祖谷川中流部右岸（善徳地区）および左岸（今久保地区）にあります。善徳地区は昭和 34 年(1959)3 月 31 日に、今久保地区は昭和 55 年（1980）3 月 4 日に徳島県砂防課の地すべり防止地域として指定されました。その後、昭和 57 年（1982）に直轄地すべり防止区域に編入されました。現在は四国山地砂防事務所によって、地すべり対策事業が行われています。善徳地すべりは、徳島県三好市に位置し、吉野川の支流である祖谷川の中流域に広がる善徳・今久保の２地区にまたがった標高 300m～1,000mの平均地形勾配約 25° の緩斜面に最大斜面長約 900m、最大幅約 2,000m、地すべり防止区域面積 220.9ｈａに達する日本でも最大級の破砕帯地すべりであります。地質的には三波川帯の結晶片岩帯にあって、主に地下部で泥質片岩、砂質片岩の互層、上部は緑色片岩を主体とした結晶片岩から構成されており複雑な機構を有しています。現在も移動量は大きく、年間約 60ｍｍの移動が観測されている箇所が存在します。 善徳地すべり防止区域は、**写真 3** の図のように大小いくつかの地すべりブロックにより構成されており、関連する小ブロックを統合していくと、大きく７つの地すべりブロックに分けられます。 四国の地盤８８箇所１０番の中で、**写真 4、5** の資料のように詳細に紹介されています。			

得られる教訓	多くの地滑りが大地震を契機に発生することを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	徳震１０	昭和南海地震で打樋川堤防決壊

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県阿南市見能林町　打樋川			
見所・アクセス	国道 55 号阿南道路の那賀川に架かる橋を渡り南に約 6km 行った付近に橘湾の火力発電所の煙突が見える手前に松が植えられいる打樋川の堤防の間に配水用の樋門が見えます。この付近が昭和南海地震で打樋川堤防決壊した場所です。			
写真・図	写真 1　 写真 2　 写真 3			
解説文	昭和 21 年 12 月 21 日午前 4 時過ぎの南海地震の時のことを阿南市見能林町に嫁いだ女性が義父から教えられた地震後の心構えを大切にしたため津波から家族を守ることができたという体験談が、四国防災八十八話の第 21 話に語れています。 「一二月一二日未明の南海地震の時のことです。グラッ！ グラッ！ 突然襲った地震に、私は今まで経験したことのない大きな衝撃を受け、ただならぬ危険を身に感じました。津波が来る、 必ず津波がやって来ると思いました。私は子どもたちを素早く戸外へ連れ出し、モチの木を皆でかかえてきました。早くどこか高い所へ避難しなければと思い、家族に身仕度をさせ、塩・味噌・米など非常食品を持って、近所の高いお家に避難させてもらいました。 その直後、晴聞の中に、津波の轟音が聞こえてきました。時間がたち、夜も明け、私たちが家へ帰って来 たところ、家、家具、収穫したばかりのお米など、ありとあらゆる物すべてが泥まみれとなり、眼も当てられぬ有様でした。また、家の前の道路には、２00 トン級の船が打ち上がっていました。時聞が経つにしたがって、お隣の人も、避難先から帰って来て、無事であったことを共に喜ぴ合いました。こうした未曾有の出来事の中に、一人の怪我人も出なかったことは、今は亡き父の日頃の教訓のお蔭なのです。」と語られています。 **写真 1、2、3** は、その船が橘湾から打樋川を遡上した津波で打ち上がった打樋川堤防決壊場所付近の現在の状況であります。			

得られる教訓	亡き父の教え、昔からの住民にその土地で起こった災害について聞いておくことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで		平成以降	

整理番号	徳震１１	橘湾奥の鵠（くぐい）和光神社の「石碑」

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県阿南市橘町青木　和光神社			
見所・アクセス	国道 55 号を四国電力の橘火力発電所を南に約３ｋｍ進んだ所に鵠（くぐい）集会所があります。国道を挟んだ山側に和光神社があります。神社の階段脇に、高さ 3m 余りの津波碑が建てられています。			

写真・図

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

解説文

阿南市の橘湾の湾奥部にある橘町などは昭和 21 年の南海地震津波と昭和 35 年のチリ地震津波で大きな被害を受けています。それは**写真 2** のような橘湾の V 字型湾の地形特性が素因です。橘湾奥には昭和南海地震とチリ地震津波に関する石碑が**写真 1** のように 3 箇所建立されています。

その１つは、鵠（くぐい）和光神社の「石碑」（**写真 3**）です。

阿南市橘町青木にある和光神社の階段脇に、高さ 3m 余りの「津波碑」（**写真 4**）が平成４年に建てられました。この碑には、「鵠（くぐい）地区ではおよそ 100 年毎に襲われた過去の地震津波の歴史が示され、平常時にそのことを心に留めるよう」戒めています。この碑には 1946（昭和 21）年の南海地震津波と 1960（昭和 35）年のチリ地震津波の浸水高（**写真 5**）が刻 まれ、住民が常にその高さを実感できるようになっています。

現在の航空写真、**写真 6** に昭和南海地震とチリ地震津波に関する石碑がある和光神社の場所を示す。橘湾の海岸沿いを走る国道 55 号の横にあり、海から極めて近い場所にあることが分かります。

V 字型湾の湾奥部では、津波エネルギーが集中、大津波に襲われる危険性が高く、橘湾奥地区では宝永地震（1707.10.28）時の津波でも大被害を受けています。また、南 海地震のような近地津波ばかりでなく、17,000km も離れたチリ沖で発生した遠地津波でも被害の恐れがあることも知っておく必要があります。

得られる教訓	V 字型湾の湾奥部では、津波エネルギーが集中、大津波に襲われる危険性が高く、橘湾奥地区では宝永地震時の津波でも大被害を受けています。また、南海地震のような近地津波ばかりでなく、チリ地震の遠地津波でも被害の恐れがあることも知っておく必要があります。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	徳震１２	大原「地神上棟式記念碑」

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県阿南市福井町大原			
見所・アクセス	阿南市福井町大原の国道 55 号近くの大原集会所西に「地神上棟式記念碑」があります。そこには、「昭和南海地震発生とともに大津波が福井村を襲い、海岸地の一帯が泥海になった。 大原平野の田畑は砂礫で覆われてしまった。」などと刻まれています。			
写真・図	 写真 1 写真 2 写真 3			
解説文	阿南市の橘湾の湾奥部にある福井町などは昭和 21 年の南海地震津波と昭和 35 年のチリ地震津波で大きな被害を受けています。それは橘湾の V 字型湾の地形特性が素因です。橘湾奥には昭和南海地震とチリ地震津波に関する石碑が**写真** 1 のように 3 箇所建立されています。 そのひとつは、福井町大原の地神上棟式記念碑です。　阿南市福井町大原の国道 55 号近くの大原集会所西（**写真 2**）に、昭和南海地震(1946.12.21)からちょうど 2 周年目に建てられ、当時の被害の様子を記した「地神上棟式記念碑」（**写真 3**）があります。 そこには、「南海地震発生とともに大津波が福井村を襲い、海岸地の一帯が泥海になった。大原平野の田畑は砂礫で覆われてしまった。」などと刻まれています。			

得られる教訓	津波に襲われた田畑は、塩害を受けるばかりでなく、砂礫の堆積により長期間使用不可能となり、農業への被害は甚大です。また、沿岸域の湿地や河川は環境上も貴重で多様な生態系が育まれている場でもあり、環境保全面からも大津波による被害防止対策を急ぐことが必要です。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで		平成以降	

整理番号	徳震１３	住吉神社「海嘯潮痕標石」

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県阿南市福井町浜田　住吉神社			
見所・アクセス	国道 55 号の福井町大西の交差点を東に曲がり、椿泊に向かう県道 26 号を約 700m 行き、さらに東の県道 287 号線を約 1 km 行くと海岸堤防に出ます。この海岸堤防を北に約 300m 行った所に住吉神社があります。神社階段脇に、海嘯潮痕標石が建っています。そこには、昭和南海地震で津波が 10 段目まできたことなどが刻まれています。			
写真・図	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4
解説文	阿南市の橘湾の湾奥部にある福井町などは昭和 21 年の南海地震津波と昭和 35 年のチリ地震津波で大きな被害を受けています。それは橘湾の V 字型湾の地形特性が素因です。橘湾奥には昭和南海地震とチリ地震津波に関する石碑が**写真 1** のように 3 箇所建立されています。 そのひとつは、福井町浜田の住吉神社の石碑です。阿南市福井町浜田（旧後戸）の住吉神社（**写真 2**）の階段脇に、「海嘯潮痕標石」（**写真 3**）が建っています。 そこには、「昭和 21 年(1946)12 月 21 日の夜明けに大地震。大音響と共に津波が来襲、最初の波は、住吉神社の石段第 6 段目まで、一旦退き、間もなく再来、2 番目の波は 10 段目まで（**写真 4**）。この大津波により、大戸、後戸、赤崎、大原、湊、大西、吉津、大宮、山下、宮宅まで泥海となった。津波は約半時間後に退いた。負傷者 3 名、家屋 13 棟、船 10 艘および家畜を流失、床上浸水 197 戸、衣食もほとんど流失、大変困った。」などと刻まれています。			

得られる教訓	津波は数回、長時間にわたり押し寄せます。必ずしも第 1 波が最大になるとは限らず、2 波目や 3 波目が大きくなることもあるので注意が必要です。すなわち、高い所へ避難した後は、半日もしくは津波警報が解除されるまで、自宅へ物を取りに帰ったり、海の様子を見に行くなどの行為は禁物です。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで		平成以降	

整理番号	徳震１４	椿八幡神社常夜燈台石（安政南海地震碑）

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県阿南市椿町横尾　椿八幡神社			
見所・アクセス	国道 55 号の福井町大西の交差点を東に曲がり県道 26 号を経由して四国最東端の岬「蒲生田岬」へ向かう県道 200 号線の途中、椿町横尾に八幡神社があります。神社入り口に高さ 3.7m の一対の常夜灯が建っています。その台石に安政南海地震のことが彫られています。			

写真・図

写真１

写真２

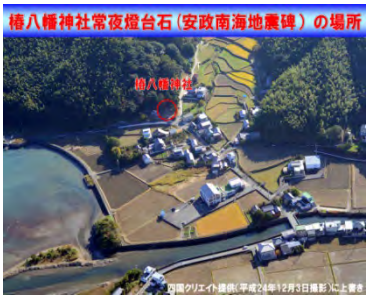


写真３

写真４

解説文

四国最東端の岬「蒲生田岬」への途中、椿町横尾に**写真１**の八幡神社があります。

神社入り口に高さ 3.7m の一対の常夜灯が建っており、その台石（**写真 2**）に安政南海地震のことが彫られています。文面には「嘉永七年（１８５４）十一月四日四ツ時（午前十時）に地震があって、高潮が堤防を越え川筋の奥深く迄入った。人々は再度の津波に対処していたが、その日はたいしたことにならなかった。翌五日夕刻七ツ時（午後四時頃）大地震となり、地震鳴動が鳴りやまなかった。人々はあわてふためいて、老人を助け子供を背負い、牛馬を駆り器財を担って逃げた。浸水流家二十七軒、土石に埋もれた田畑は三十町になったが死者はなかった」と刻されています。

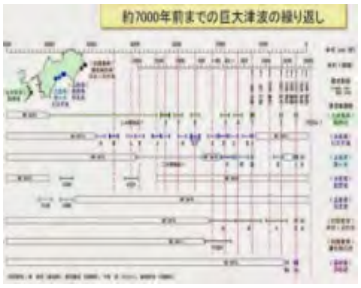
当時の安政南海地震津波の被害や避難の様相が分かりやすく刻字され、伝承されています。

その安政南海地震のことが彫られている常夜灯がある椿八幡神社の場所を、現在の航空写真（**写真 3、4**）に示す。リアス式海岸入江の溺れ谷低地にあり、海のすぐ近くにあることが分かります。

得られる教訓	地震鳴動が鳴りやまなかった。人々はあわてふためいて、老人を助け子供を背負い、牛馬を駆り器財を担って逃げたという切羽詰まった避難の様相を想像して、次の南海トラフ巨大地震に備えてほしいことを教えています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震１５	津波砂層痕跡がある蒲生田池

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県阿南市椿町蒲生田			
見所・アクセス	県道 200 号線から四国最東端の岬「蒲生田岬」の手前、山側に蒲生田池あります。 蒲生田池では津波堆積物の厚さを調べる調査が行われ、他の池の調査結果とともに巨大津波が繰り返し発生していることを示す津波砂層痕跡のある池の一つとなっています。			
写真・図	 写真１	 写真２	 写真３	
	 写真４			
解説文	写真の蒲生田池は四国最東端の岬「蒲生田岬」の近くにあります。その池の様子は**写真 1、2** に示します。 中央防災会議 「東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会」（成２３年６月１７日議事概要によると、「土佐湾の湾央のただす池では、約 4800 年前まで記録が残っており、その間 14 回、津波砂層が見られる。また、九州東部の龍神池では、宝永、正平、天武やその前の発生履歴も含め、3300 年間で８回 繰り返しており、間隔は最短で 300 年から 350 年のインターバルが５回、700 年のインターバルが２回あることが分かっている。さらに、土佐湾の蟹ヶ池の津波堆積物から、約 2000 年前に宝永の砂の約２倍から３倍くらいの厚い砂を持ち込む、津波があったことが分かっており、それ以前と以降では堆積環境が大きく異なる。 現在、南海トラフ沿岸域では最大約 7000 年前までの記録を取ることができるが、7000 年を超える、例えば１万年に１回、例えば 30m を超えるような津波に関しては、答えることができない。一方、津波堆積物の厚さから少なくともこの 7000 年間に 30m を超えるような津波発生に関しては考えなくてよい。また、宝永クラスがほぼ 300 年から 350 年に１回来ており、2000 年前に一度、その約 2.5 倍程度の津波砂層が見られる。」という巨大地震の津波砂層痕跡からわかってきたことが述べられています。 蒲生田池については、**写真 3** に示す「約 7000 年前までの巨大津波の繰り返し」の表の中で、津波砂層痕跡のある池の一つとなっています。最後に、蒲生田集落側から津波砂層痕跡がある蒲生田池が鮮明に映っている現在の航空写真（**写真 4**）にその場所を示す。			

得られる教訓	津波砂層の層厚などから書物に記録が残る南海地震以前に、巨大津波を伴う地震が発生していたということを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震１６	志和岐の安政南海地震津波碑

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡美波町志和岐天王９８			
見所・アクセス	徳島県美波町志和岐の志和岐公民館前に安政南海地震津波碑が建てられています。			

写真・図

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

写真７

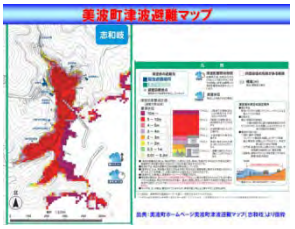


写真８

解説文

徳島県美波町志和岐には、志和岐公民館前に**写真 1、2、3** のように安政南海地震津波碑が建てられています。ここでは前日の安政東海地震の影響を、前兆と捉えいち早く逃難し、用心をしていたので、海岸の舟屋などは全て流失したが死者はなかった。これも神仏のご加護の賜物と感謝しているなどが刻されています(**写真 4**)。

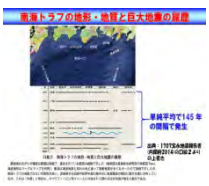
志和岐の現地は、漁港の背後にある漁村であり狭隘な、山が海岸まで迫った平地に住家が張り付いています。漁港のすぐ背後にある津波避難場所になっている吉野神社前の駐車場(**写真 5**)が唯一の広場になっている程度です。この志和岐の安政南海地震津波の伝承碑がある場所を、現在の航空写真（**写真 6**）に示します。

現地の志和岐公民館前には、津波浸水浸水範囲と津波避難場所が表示した津波避難場所の看板(**写真 7**)が設置され住民への津波避難場所の周知をお行っています。

また**美**波町津波避難マップ（志和岐）を**写真 8** に示します。これをみると大半の住家が津波で 5～１０m浸水する壊滅的な被害を受ける想定となっています。南海トラフ地震が発生したら一刻も早く高い安全な場所に避難することが必要なことが分かります。

得られる教訓	「いち早く逃難し死者はなかった」との教えは津々浦々に通ずる伝承すべき教訓です。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震１７	我が国最古の地震津波碑康暦（こうりゃく）の碑

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡美波町東由岐大池			
見所・アクセス	美波町立由岐小学校前の東由岐大池の船着場の山側に少し入り込んだ所に、我が国最古の地震津波碑と云われている、康暦２年（1380）建立の正平（康安）南海地震の康暦の碑があります。			
写真・図	写真１ 写真２ 写真３ 写真４ 写真５ 写真６ 写真７ 写真８  写真９			
解説文	四国には、太平洋の沿岸や沖積平野、山麓などに、「子孫に同じ轍を踏ますまい」と地震・津波や水害の警鐘文が刻字された石碑などが沢山残っています。　そのひとつとして、徳島県美波町由岐には、我が国最古の地震津波碑と云われている、康暦２年（1380）建立の正平（康安）南海地震（1361 年８ 月 3 日）の康暦の碑（**写真 1、2**）が、**写真 3** の位置にあります。美波町立由岐小学校前の東由岐大池の船着場の山側の小道（**写真 4**）から、約 60m 登 た先に碑（写真 5）はあります。 『太平記』によると、康安元年（1361 年）の大地震について、「康安元年（正平一六年）六月十八日の巳刻より同十月に至るまで、大地おびただしく動いて、日々夜々に止時なし。山は崩れ谷を埋み、海は傾て陸地に成しかば神社、仏閣倒れ破れ、牛馬人民の死傷する事、幾千万と云数を知ず。総て山川・江河・森林・村落此災に遭ずと云所なし、中にも阿波の雪（由岐）の湊と伝浦には、俄に大山の如くなる潮漲来て、在家一千七百余宇、悉塩引に連て海底に沈しかば、家々に有所の僧俗、男女、牛馬、鶏犬、一も残らず底の藻屑と成りけり。（後略）」とあります。その時の津波に襲われ由岐の人々が津波にのまれる凄まじい様子（写真 6）が徳島県立文書館の記録資料に見る南海地震平成 28 年度特別企画展解説資料で展示されていました。 この康暦の碑は、平成２９年７月２０日国連本部で行われた皇太子殿下のビデオ基調講演において、紹介され大変多く方が知ることになりました。宮内庁のホームページには、皇太子殿下基調講演（国連本部）で「水と災害に関して歴史から学ぶ」ことの意義についての説明の中で紹介された内容（日本語訳）　が次のように紹介されています。「日本ではこうした石碑が地震や津波が発生した地点に点在しています。この地図（写真 7）は，四国地方における災害記念碑や記録の例です。これらは，それぞれ地震の発生年や，津波到達地点，被害の規模を示す貴重な手掛かりとなっています。」 その翌年、平成 30 年 6 月 27 日に皇太子さまが南海地震の被害や教訓を伝える地震津波碑などの視察で美波町由紀のの日本最古の地震津波碑を訪れました。その時の様子を地元徳島新聞（**写真 8**）は、皇太子さま来県、熱心に視察地域の力に、などと伝え、地域住民の防災活動の励みになるよう報道しています。 内閣府の 1707 宝永地震報告書（2014）の南海トラフの地形・地質と巨大地震の図（**写真 9**）に示されているように南海トラフ地震は、684 年白鳳の地震から南海トラフ地震でない可能性が高い 1605 年慶長を入れて昭和の南海地震まで 9 回発生したとされていて、白鳳の地震 684 年（天武 13 年）から、1946 年（昭和 21 年）まで 9 回の発生の記録があり、単純平均で 145 年の間隔で発生しています。			

得られる教訓	650 年以上前の記録に由岐が登場していることは、周辺地域も含めて津波で大きな被害を受ける地域であること、また昭和南海地震からは、現在、70 年以上経過していることを考えると南海地震が発生する時期が時計の針が進むごとに近づいていることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震１８	由岐町の昭和南海地震津波最高潮位碑

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渦水・利水
場　　所	徳島県海部郡美波町東由岐本村３４			
見所・アクセス	徳島県美波町由岐には昭和南海地震津波の最高潮位を印した石柱が数箇所設置されています。天神神社下、地域交流支援センター横には、昭和南海地震の津波高を示す石柱が建てられています。また、天神神社階段、上から 19 段目に想定津波高の看板が設置されています。			

写真・図

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

写真７

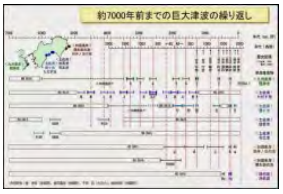
写真８

写真９

解説文
徳島県美波町由岐には昭和南海地震津波の最高潮位を印した石柱が数箇所設置されています。**写真 1、2、3、4、**に示すように、由岐の東の天神神社下、地域交流支援センター横には、昭和南海地震の時、押し寄せた津波の高さを示す石柱が建てられています。 天神神社の階段には、上から 19 段目の階段横に想定津波高の看板（**写真 5**）が美波町によって設置されています。その高さは、**写真 6** のように昭和南海地震津波最高潮位よりかなり上の非常に高いところにあります。また、天神神社の津波避難階段上から望む由岐町の中心部を**写真 7** に示します。さらに由岐湾奥にある由岐中学校から山側の高い道路に通じる津波避難階段を**写真 8** に示します。 由岐の町には、他にも多く高い場所に上がれる避難階段が設置されています。 由岐町は、常日頃から訓練などが盛んに行われていて、もしもの時に一刻も早く逃げることなどの防災意識の高い町として有名です。 現在の航空写真（**写真 9**）に、由岐町の天神神社下、地域交流支援センター横の昭和南海地震津波最高潮位碑の場所 を示します。いずれも由岐港の直背後の海に近い集落にあることが分かります。

得られる教訓	昭和南海地震で押し寄せた津波の高さを示す石柱や美波町が設置した想定津波高さ表示した看板から南海トラフの巨大地震津波の大きさを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震１９	津波砂層痕跡がある田井ノ浜の池

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡美波町田井			
見所・アクセス	田井ノ浜の池は海水浴場で有名な田井ノ浜の南端の少し山側に入ったところにあります。 海岸に近く長い間乱されない環境にあった田井ノ浜の池の津波砂層の層厚などから書物に記録が残る南海地震以前から巨大津波を伴う地震が発生していたことがわかってきています。			
写真・図	写真１  写真２ 写真３ 写真４			
解説文	田井ノ浜の池は海水浴場で有名な田井ノ浜の南端の少し山側に入ったところにあります。その状況は**写真１**に示します。 中央防災会議 「東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会」（平成２３年６月１７日議事概要によると、「土佐湾の湾央のただす池では、約 4800 年前まで記録が残っており、その間 14 回、津波砂層が見られる。また、九州東部の龍神池では、宝永、正平、天武やその前の発生履歴も含め、3300 年間で８回 繰り返しており、間隔は最短で 300 年から 350 年のインターバルが５回、700 年のインターバルが２回あることが分かっている。さらに、土佐湾の蟹ヶ池の津波堆積物から、約 2000 年前に宝永の砂の約２倍から３倍くらいの厚い砂を持ち込む、津波があったことが分かっており、それ以前と以降では堆積環境が大きく異なる。 現在、南海トラフ沿岸域では最大約 7000 年前までの記録を取ることができるが、7000 年を超える、例えば１万年に１回、例えば 30m を超えるような津波に関しては、答えることができない。一方、津波堆積物の厚さから少なくともこの 7000 年間に 30m を超えるような津波発生に関しては考えなくてよい。また、宝永クラスがほぼ 300 年から 350 年に１回来ており、2000 年前に一度、その約 2.5 倍程度の津波砂層が見られる。」という巨大地震の津波砂層痕跡からわかってきたことが述べられていいます。 田井ノ浜の池については、**写真２**に示す「約 7000 年前までの巨大津波の繰り返し」の表の中で、津波砂層痕跡のある池の一つとなっています。海岸からの距離や現在の池の様子は**写真３、４**に示します。			

得られる教訓	海岸に近く長い間乱されない環境にあった田井ノ浜の池の津波砂層の層厚などから書物に記録が残る南海地震以前から巨大津波を伴う地震が発生していたことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震２０	木岐の昭和南海地震津波碑

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡美波町木岐５５２−８			
見所・アクセス	徳島県美波町の木岐公民館前には、昭和南海地震津波の最高潮位を印した石柱が設置されています。「忘れまじ　おそるべし大自然のこの暴威を」の銘文の警鐘文が刻まれています。			
写真・図	 写真１ 写真２ 写真３ 写真４ 写真５ 写真６			
解説文	徳島県美波町木岐には昭和南海地震津波の最高潮位を印した石柱が設置されています。写真 **1、2** に示すように、木岐公民館前には、昭和南海地震の時、押し寄せた津波の高さを示す石柱が建てられ、「忘れまじ　おそるべし大自然のこの暴威を」の銘文の警鐘文が刻まれています。常日頃から心の準備をして警戒するようにとの教訓を伝承しています。 **写真 3** には木岐公民館前にある避難場所を示す看板を、**写真** 4 には、木岐公民館の裏山の避難階段の１０m 表示から 35 段目の約 17m の場所に南海トラフ巨大地震津波の想定津波高を表示している状況です。**写真 5** はその場所から木岐漁港を望んだ写真です。**写真 6** は、海に V 型の湾奥にあることがよく分かる木岐地区の航空写真です。木岐地区は津波が高くなる場所に開けた集落であることがわかります。			

得られる教訓	昭和南海地震津波の高さを示す石柱と想定津波高が表示された避難階段の眺望点から海側を望めば津波が高くなることが想像できることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	徳震２１	牟岐町の昭和南海地震最高潮位石柱

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡牟岐町中村本村１０−１			
見所・アクセス	徳島県海部郡牟岐町には、牟岐小学校前の昭和南海地震の碑や最高潮位の石柱などが多く建立されています。迷わず高台にある「海蔵寺」に逃げて助かった話などがあります。			
写真・図	 写真１ 写真２ 写真３ 写真４ 写真５ 写真６ 写真７			
解説文	徳島県海部郡牟岐町には、牟岐小学校前の昭和南海地震の碑や最高潮位の石柱などが**写真１**のように多く建立されています。現在の航空写真（**写真３**）に海に近い牟岐小学校の場所を示します。 また、それ以前の慶長地震、宝永地震、安政南海地震に被害を受けた記録があります。 四国の歴史地震（慶長・宝永・安政）の津波高を調査して昭和南海地震に対して、過去の南海地震の津波高がどの程度になるかを村上仁士徳島大学名誉教授が「津波概論」で**写真２**の図のように示されています。これによると慶長・宝永地震の津波高は２倍～4 倍以上にもなっています。徳島県沿岸部でも２倍～3 倍程度になっています。現地の昭和南海地震津波最高潮位標のその３倍は過去に津波が来襲していたことになります。昭和南海地震の 4.52ｍの津波痕がある牟岐小学校は 4.52ｍ×3 倍＝約１４ｍの津波が来襲していたと考えることができます。徳島県津波浸水想定（最大規模）では、牟岐町の津波高は１３．４ｍとなっています。また大牟岐田の児童公園内には、**写真４、５**のような牟岐町における南海地震史碑が平成８年 12 月 21 日に建立されています。 さらに、磯田道史著書「天災から日本史を読みなおす、先人に学ぶ防災」の中で、母が生きのびた徳島の津波、津波から生きのびた話「家は海から約１５０m、海抜３．８ｍの場所（**写真６**）にあった。牟岐町の住民は、昔から津波に遭ってきたから、町民は逃げる場所を心得ていて、迷わず「海蔵寺」（**写真７**）に逃げて助かった」やエピソードや津波常襲地帯に行く時には、たとえ一泊であっても高台の避難場所を絶対に確認する」などの教訓を述べています。			

得られる教訓	津波の最高潮位標から、今後発生する南海地震の津波高を想定できること、逃げ場所を絶対連呼しながら逃げることなどの現在に活かす活用法があることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震２２	石垣に修復の跡が残る牟岐八幡神社

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡牟岐町灘宮田　八幡神社			
見所・アクセス	牟岐町の八幡神社の石垣には、安政南海地震津波で被災し、修復した跡が残る石垣や宝永地震の記録が記された掛板があります。			
写真・図	写真１ 写真２ 写真３ 写真４ 写真５			
解説文	牟岐町の八幡神社（**写真１**）の石垣には安政南海地震津波被災後、修復した跡が残る石垣（**写真２、３**）や宝永地震の記録が記された扁額（へんがく）（**写真４**）があります。 安政南海地震の記録は、牟岐東浦の津田屋喜右衛門「地震津浪嘉永録」によると「嘉永７年（1854）11月４日昼４ツ時（10時）地震が起こり、夜５ツ時（８時）頃から夜明けまでに３、４度地震が続いた。翌５日は昼８ツ時（午後２時）頃に大地震が起こり、瓦は飛び散り地中はひび割れ、７ツ時（午後４時）には津波が来襲した。人々は命からがら八幡山などに逃げ去り見物していたところ浜先の家数百軒は将棋の駒を倒すように流失した。津波は３度あり、潮の高さは３丈余で、山々の麓に差し込んだ潮先は５、６丈にも見えた。流死の人数は20余人に及んだ。」とあります。 また 写真４の八幡神社の掛板には宝永地震の記録があります。そこには牟岐浦に勤務していた役人が、津波で人馬とも多数流死している中で、一人山に逃げて人を助けもせず帰ったのは不届きであり、永のお暇を取らせた」と記されています。それ以前の慶長地震でも牟岐町史には、「慶長９年（1604）12月16日未明酉上刻、月の出頃より大津波、溺死者多数」とあり被害を受けた記録があります。 この安政南海地震津波で被災し、修復した跡が残る石垣や宝永地震の記録が記された扁額がある牟岐八幡神社の場所を航空写真（**写真５**）に示します。この写真からは海岸から150m程度山側に入った山裾に八幡神社がありますが、現地で神主様から江戸時代は、牟岐八幡神社の前はすぐ浜であったと伺いました。現地には確かに昔の海岸堤防らしき施設の前に、現在の防潮堤防があります。			

得られる教訓	現在でも八幡神社石垣に残る津波被災の修復跡が、過去の津波の大きさを私たちに伝えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和30年代まで		昭和60年代まで		平成以降

整理番号	徳震２３	Ｖ字型湾浅川の津波碑

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡海陽町浅川　役場出張所敷地内			
見所・アクセス	海陽町役場浅川出張所の敷地に、昭和南海地震津波に逃げ遅れて、2 人の子を亡くした母親の体験談、「お母ちゃんいけんもん」の石碑が建立されています。また観音庵の階段には、安政南海地震津波の来襲地点と昭和南海地震津波の来襲地点の石標が建立されています。さらに浅川天神社には、安政の津波碑文、慶長地震で折損した鳥居が残されている他、御崎神社境内には安政大津浪碑が建立されています。			
写真・図	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	写真 10
解説文	昭和 21 年 12 月 21 日午前 4 時 19 分、マグニチュード 8.0 の南海地震が発生しました。海陽町の浅川湾は典型的なＶ字型湾（**写真 1**）で、地震発生から十数分後には大津波が来襲し、死者 85 名、家屋全壊 364 戸、流出 44 戸などの被害をこうむりました。 その津波来襲後の写真（**写真 3**）が残っています。それによると大きな船が小さな川に沿って津波が遡上して船が流されたと想定することもできます。この津波来襲時に持ち物を準備していたことから逃げ遅れ、津波が押し寄せる中を逃げたが逃げ遅れて 2 人の子を亡くした母親の体験談の、「お母ちゃんいけんもん」という刻字が浅川湾に石碑（**写真 2**）として建立されています。このときの教訓、「津波の避難は身一つで一刻も早く逃げること」を後世に伝えようとしています。 また、この地区の観音庵（**写真 1** の左下写真）への階段には、安政南海地震津波の来襲地点と昭和南海地震津波の来襲点の石標が建立されています。さらに**写真 4** の浅川天神社には、**写真 5 や写真 6、写真 7** のように昭和の南海地震津波最高潮位碑.、安政の津波碑文、慶長地震で折損した貴重な鳥居（旧社地より出土）が残されています。御崎神社の前には同じく**写真 8** のように昭和の南海地震津波最高潮位碑がある他、御崎神社境内には安政大津浪碑（**写真 9**）が建立されています。 この浅川地区は徳島県内では昔から多くの津波被害を蒙ってきたことから多くの津波自然災害伝承碑や過去の津波災害の教訓を後世に伝える津波十訓（**写真 10**）があることで良く知られています。			

得られる教訓	現在は、津波防波堤が湾口部に建設されていますが、南海トラフの巨大想定の津波は、大きく軽減出来ても完全に防御できない。一刻も早く逃げることが必要であることを教えています。

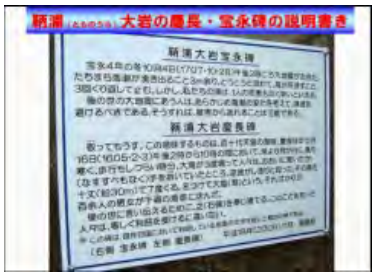
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震２４	鞆浦海嘯記と森繁自伝

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡海陽町鞆浦立岩			
見所・アクセス	徳島県海部町鞆浦の旧海部川に沿ったところに海嘯記のタイトルが付く、安政南海地震のことを彫り込んだ石碑があります。また、この碑の近くの奥浦の「みなみ旅館」の三階に宿泊し、昭和南海地震の大津波に遭遇した森繁久彌（もししげひさや）さんが　「異変がおきたのは、未明のことであった。」と、後に森繁自伝に書いています。			
写真・図	写真１	写真２	写真３	写真４
	写真５			
解説文	徳島県海部町鞆浦の旧海部川に沿ったところに海嘯記のタイトルが付く、安政南海地震のことを振り込んだ石碑（**写真１**）があります。それには、歴史探訪南海地震の碑を訪ねて（毎日新聞高知支局平成 14 年 11 月発行）**写真 2** によると 898 文字に渡ってその時の津浪のことが書かれています。それによると高さ３．６ｍの津波が入ったことが刻まれていますが人的被害は無かったようです。 「武士の家計簿」の著者で有名な磯田道史氏が著書「天災から日本史を読みなおす、先人に学ぶ防災」（2014 年 11 月 21 日発行）の中で、ある満州帰りの男の被災として、森繁久彌（もししげひさや）さんが、この碑の近くの鞆奥町（現在の海陽町）奥浦（**写真 3**）の「みなみ旅館」（**写真 4**）の三階に宿泊し、昭和南海地震の大津波に遭遇した時のことを、　「異変がおきたのは、未明のことであった。男はのちにこう書いている。「寝ている私の頭に異様な物体が落下して来て眼がさめた」、「地震だ！/梁が無気味な音をたててきしみ、いまにもこの家が倒れるようである。/真っ暗な中に私は死を待った」　しかし、男は粘った。「誰かーー誰かーー」と絶叫しながら、三階から玄関まで死に物狂いで駆け降りた。血だらけになって裸足で表へ出たら、腰を抜かした。「津浪がくるぞ！　山へ逃げろ！」という声。男は闇夜の中で、山がどこかわからない。腰を抜けて歩けないが、口が達者なのが幸いした。「山はどこだ」「山はどっちです」と叫んでいるうち、誰かが、むんずと後から男を抱き上げ、山に走った。～中略～ 男はのち俳優として成功し、文化勲章を受章。男の名は森繁久彌。長生きし、この話を「森繁自伝」に書いている。」と記述され、切羽詰まった当時の避難の様子を紹介し、更には森繁さんの語る引き波の怖さから、引き波がくる前に脱出を図れ、津波の時の引き波は恐ろしいとしています。 その鞆浦海嘯記碑と森繁久彌さんが宿泊していた「みなみ旅館」の場所を現在の航空写真（**写真 5**）に示します。			

得られる教訓	この狭い鞆浦には、慶長、宝永、安政の津波碑があります。昭和南海地震も含めて過去の津波の実態を知り、現在までの地形や土地利用変化も考えながら被害を最小化することが必要なことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	徳震２５	津波高、十丈(30m)の大岩の津波碑

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡海陽町鞆浦			
見所・アクセス	徳島県南部の海陽町の鞆浦漁港近くの県道 197 号線の横に、茶褐色をした巾 5.2m、高さ３ｍの大岩があります。この岩には、慶長地震と宝永地震のことが彫り込まれています。 大岩には刻字の内容を説明した案内板が設置されて、その中で目につくのが慶長地震で高さ十丈（約 30m）の津波が来たいう部分です。			
写真・図	 写真１	 写真２	 写真３	
解説文	宝永４年 10 月４日（1707 年 10 月 28 日）震潮の旧記写しの中で、興味を惹く話があります。「古老の言い残したことを伝える者の言うには、その津波は十六夜の出る月を隠して、山より高く入って来た。(後略)」とあり、巨大津波で発生したこと伝えています。同じ海陽町の鞆浦（ともうら）には、津波高、十丈(30m)の記述がある碑があります。鞆浦漁港のそばに**写真１、２**のような幅５ｍ、高さ３ｍの大岩があります。この岩には、慶長地震と宝永地震のことが彫り込まれています。「謹んで申しあげる。右意味するものは、人皇百十代の御時、慶長九年十二月十六日午後二時ごろから十時ごろまでの間、常より月が白く、風が寒く、歩行もしづらい時分、大海が三度どよめいて人々大いに驚いたが、為すすべ手をこまねいていたところ、海面では逆波が頻りに立った。その高さは十丈（約 30m）、寄せ来ること七回。名付けて大塩（潮）という。そればかりか男女千尋の海底に沈むもの百余人。後代に言い伝えるために、之（石碑）を奉じ建てる。このことを知った後世の人々は等しく利益を受けるに違いない。宝永四年の冬十月四日午後二時ごろ土地が大揺れした。たちまち、海潮湧き出ずること一丈（約３m）余り。どくとくと流れて高台を浸すこと三回にして止まる。しかし、私たちの浦は一人の死者もなく幸いと言える。後世の大地震にあう人は、最初から海潮の変化を考慮して津波を避けるべきである。そうすれば被害を免れることは可能である。」とあります。最初から慶長の 30m の津波を考えて避難するべきであると、具体的な対処の術を伝えています。 慶長地震と宝永地震のことが彫り込まれた大岩の津波碑の場所を現在の航空写真**(写真 3)**に示します。			

得られる教訓	2012 年の３月 31 日内閣府が発表した南海トラフの巨大地震想定の津波高は、海陽町の場合、徳島県で最大の 20.3m となっています。この碑は、これより大きい慶長津波 30m を考えて避難すれば、被害を免れることは可能であると教えています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	徳震２６	震潮記（しんちょうき）

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡海陽町宍喰浦宍喰			
見所・アクセス	徳島県海陽町宍喰浦の組頭庄屋であった田井家に「震潮記」という安政南海地震等の地震・津波災害対応に関する克明な被災録が残されています。慶長地震津波の言い伝えによれば、宍喰町の中心部の愛宕山の八分目（TP19m）の高さまで津波が来たが、頂部（標高 TP23.5m）の愛宕神社に逃げた多くの住民が助かったことから助命山と呼ばれ、現在も避難場所になっています。			

写真・図

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

写真７

解説文

徳島県海陽町宍喰浦の組頭庄屋であった田井家に「震潮記」（**写真 1**）という安政南海地震等の地震・津波災害対応に関する克明な被災録が残されています。特に安政の津波に襲われた宍喰の被害の様子を描いた図（**写真 2**）には、流失家屋を藍色、浸水家屋を黄色、被害が無かった家屋を赤色で示すなど、各家の被害状況が正確に描かれています。さらに町並みの区画ごとに「坐上何尺」と記され、この集落全域の浸水高もわかる貴重な史料であります。

「震潮記」には、この他に、津波は「矢を射るような速さで押し寄せ」、「寺主が本尊を背負って逃げたが老人だから足が遅く津波にのまれた」ことや、「親子といえどもひとつところにいない者は助かる暇もなく、潰れ家に親を打たれ、あるいは子をうたれ、それさえも見返ることが出来ず、また何ひとつ持って立ちのく間もなく命からがら逃げ散ったところ、たちまち逆波が来る」と切羽詰まった避難の様子が語られています。　地震発生後には、「命のほかに宝物はないと思って、迷わずに山に逃げること、迷っていたら死ぬ」と伝えています。　地震後は津波に備えて、身一つで一刻でも早く避難することを教えています。

「震潮記」は 2006 年に田井家の田井晴代氏により現代語訳（**写真 1** の右の冊子）が出版され、現在、地元の住民や小学校・中学校・高校の学生などの防災教育のアイテムとして活用されています。

筆者らが田井家でヒアリングした際（2006.12.25）には、田井晴代氏は「家に『地震・津波の話を聞かせてください』と子供たちが 4、5 人ずつ来るようになりました。」と語っておられました。「震潮記」現代語訳は地震後の津波に対処する防災行動など、いにしえの教訓を今に活かす防災活動に結びついているといえます。　さらに地元では助命山と呼ばれている愛宕山が、**写真 4** のように宍喰町の中心部から宍喰川沿い 200m 付近にあり、城跡の頂部（標高 TP23.5m）には、愛宕神社があります。慶長地震津波の言い伝えよれば、この山の八分目（TP19m）の高さまで津波が来たが、この愛宕山に逃げた多くの住民が助かったことから助命山と呼ばれるようになっということです。現在も**写真 3** のように、避難場所になって当時の津波高に相当する場所に TP19m の表示があり、言い伝えが伝承され、しっかり認識されていることがわかります。 現在、宍喰には、宍喰川の堤防などに**写真 5** のような愛宕山までの避難ルート示した看板や愛宕山より少し低い（**写真 6**）ものの家屋より飛び出した高さ 14m、収容人数 480 人の津波避難タワー（**写真 7**）が整備されています。

得られる教訓	先人が書き残した地震津波の被災録「震潮記」に学び、今日の防災教育に活かす重要性を教えています。

教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト

時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降
整理番号	**徳震 27**	出羽島観栄寺の安政南海地震津波碑				

災害種別	水害・治水	地震・津波	土砂災害	渇水・利水
場　　所	徳島県海部郡牟岐町牟岐浦出羽島			
見所・アクセス	徳島県海部郡牟岐町には、牟岐港の南約 3.7km、連絡船で 15 分の海に浮かぶ出羽島（でばしま）には安政南海地震の記録を伝える地震津波碑が観栄寺境内にあります。			
写真・図	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	写真 10
解説文	徳島県海部郡牟岐町には、牟岐町の南約 3.7km、連絡船で 15 分の海に浮かぶ出羽島（でばしま）（**写真 1**）には、港の奥の集落より高い場所にある観栄寺（**写真 2**）境内に、安政南海地震の事を伝承する昭和 3 年に再建された石碑（**写真 3**）が建立されています。その碑には**写真 4** のように「嘉永七年十一月四日の、安政東海地震で六メートル程の潮の上下があった。翌日地震が起こり、大潮が入ったが、島民は前日より山の上に避難して無事であった。御上より一人宛米六升下された」と刻まれています。安政南海地震では、人命は無事だったが、島の人家は 56 戸の内 3 戸を残して流失や損壊した被害を受けています。出羽島貞之助の記録には、「津波の大きさは、島を海中に引き込むかと思うほどだった・・・。」などと書いてあります。 現在、出羽島の集落の中に津波避難タワー（**写真 5**）が設置されています。近づくと津波避難用タスカルタワーの表示があり、平成 19 年 2 月竣工となっています。このタワー屋上の避難ステージは、集落背後の北の防潮堤とほぼ同じ高さにあります。徳島県が新たに公表（平成 24 年 10 月 31 日）した南海トラフ巨大地震の津波浸水想定図では、5～10m の場所にあり高さが足りないため、現在は、牟岐町の指定緊急避難場所から解除されています。牟岐町、平成 28 年 5 月 12 日公表の指定緊急避難場所は、（**写真 6**）の出羽島集会所（海抜 26m）など高台にある 4 つの施設になっています。南海トラフ地震津波発生時には、この高台まで避難することが必要であります。 そのタワーから港内の集落を撮影したものを**写真 7** に示します。また島の防波堤から撮影した写真 8 と高台にある観栄寺（**写真 9**）背後の山から撮影した**写真 10** のように、現在の観栄寺と密集した島の集落や津波避難タワーの様子、遠方には牟岐港が望めます			

得られる教訓	当時、出羽島の人家は 56 戸の内 3 戸を残して流失や損壊したという安政南海地震津波石碑の先人の警鐘伝承から学び、想定されている南海トラフ巨大地震津波に備えて、一刻も早く高台に避難する避難訓練などを行い地域防災力を高めることが必要があることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			